

高齢者の風景構成法に関する研究 — 高齢者の認知的特徴と時間的経過を通して —

水谷 みゆき

Key word : 風景構成法, 高齢者, 構成度, HDS-R, MMSE, 空間構成

風景構成法は、あたかも箱庭をおくように風景の構成要素を順に描き込んでゆくことで風景を構成するもので、中井久夫によって1969年に創案され、1970年に報告された芸術療法の一技法である。風景というものが描かれるのは歴史的には、単なる人や獣の絵よりはずっと後になってからであり、それはまた個人における発達史においても同様である。そこに風景を描画の素材としてみた場合の特異性が感じられ、それはひとがひととして意識的になって初めて見えてくるものとして風景画が成立するためのように思われる。そのような風景を素材とする風景構成法は「体験されている空間」を描画の風景として現出させる力があり、〈住まう場〉の確立の有無を反映し、その背後に原風景も揺曳している（大場ら、1985）とも言われる。したがって風景構成法は、意識的な「自分である」という感覚の芽生える頃に描くことが出来るようになり、その人の見ている外界を映し出すが、それは単なる対象とは異なってその中に人が生きる世界であるために、もし、それを見る人がその世界に自分の身を置くようにして眺めることができたなら、言葉の届かないところでの“理解”が可能になると考えられる。風景構成法が発達的に変化することは、子供における認知発達と軌を一にしているが、その基礎には経験の蓄積と共に身体的神経的成熟に向けての変化がある。人は成熟して大人となり、やがて老いを迎える。加齢によってもまた、風景構成法は変化するであろう。

本研究は風景構成法作品を通して高齢者の体験する世界を理解する試みの第一段階として、高齢者の認知的特徴と時間的経過から見た風景構成法作品について検討を行ったものである。

1. 在宅で通院治療を受ける平均年齢82.7歳±5.33の86名の高齢者に対して長谷川式痴呆尺度改訂版（HDS-R）、Mini Mental State Estimation（MMSE）および若干の補足テストを行うとともに風景構成法を施行した。その結果、65名が風景構成法に取り組み、その作品を高石（1994）の『構成型』（風景構成法における心理的発達段階の指標として児童期思春期を対象として考案され

た）の分類に沿って、認知テストとの関連から分析した。高石の『構成型』は風景の構成要素を羅列している段階をI型とし、線遠近法的な3次元空間の完成をもってVII型とする7段階からなる。結果は以下の通りであった。

①高齢者の風景構成法作品の『構成型』は、I型にむかう傾向を示す。

②『構成型』とHDS-RとMMSEの総得点との間には関連がみられ、HDS-Rとは $\rho = .440$, $r = .470$, MMSEとは $\rho = .523$, $r = .543$ であり、認知テストの項目のなかでは、空間見当識や立方体や五角形の図形模写、時計のイメージ描画、連続減算、逆唱といった項目との相関が高かった。さらに86名の認知テストの25項目の主成分分析の結果、記憶成分、視空間認知成分、言語成分と考えられる3成分が抽出され、これらの3成分と風景構成法65作品の高石の『構成型』との相関を調べたところ、視空間認知成分との相関は（ $\rho = .612$, $r = .571$ ）、記憶成分との相関は（ $\rho = .459$, $r = .498$ ）、言語成分との相関は（ $\rho = .426$, $r = .454$ ）となった。

2. 1に加えて個々の高齢者の作品について事例的検討を行い、高齢者の風景構成法の構成過程と作品に見られる特徴について検討した。その結果、

①風景を構成する過程は認知テストに含まれる“模写”能力と“描画”能力の両者にかかわるものの、“描画”能力の方がより重要であり、言語による風景構成要素（アイテム）の提示によってそれをイメージする能力が必要であると考えられた。

②高齢者の風景構成法作品にみられるアイテムの特徴として、“記号化”、“文字化”、“溶けた形態”、“省略”、“説明の付加”などが見られることを報告した。

イメージする能力の低下に伴い、アイテムは“記号化”されたり、“溶けたような形態”に描かれたり、重要な部分が“省略”されたり、絵の代わりに文字で置き換える場合も見られる。これらは構成度V型以上の作品には見られない。ただし「人」の手足が棒状に描かれること、およびアイテムについての説明書きの文字がアイテムの横に加えられることについてはV型以上の作品にも見られ、これらについてはイメージ能力とは別の機序が考えられた。

③高齢者の風景構成法作品にみられる空間構成の特徴については、退行的病的な“萎縮”，“アイテムを重ねる表現”，“アイテムをつなげる表現”が見られることを報告した。“萎縮”は風景構成法以外のHTP法やバウムテストにおいて、また分裂病者の風景構成法作品についてもしばしば報告されており、認知的な制約から生じる場合と心理的に生じる場合があると考えられる。アルコール嗜癖の結果低下していた認知機能が2か月の断酒によって改善されると同時に萎縮が改善し『構成型』も上がった事例や、半側空間無視を疑われる事例において紙面半分に萎縮した作品は前者にあたるものと考えられた。また認知機能としては余り変化がなく、むしろ少し落ちているにもかかわらず、感情の状態としては鬱的から躁的になると共に、萎縮が改善し、『構成型』が上昇した事例は前者と後者の中間に属すると考えられた。一方、視空間認知機能の低下した事例の中には“アイテムを重ねる表現”が顕著なものがみられた。また、被影響性が亢進していると見られる事例ではアイテムを既に描いたアイテムから離して描くことができない“アイテムをつなげる表現”がみられ、その結果として生じる2次性の萎縮についても報告した。

このように、高齢者の風景構成法作品にはその人の認知的な制約による特有の変化が見られ、作品を臨床心理学的に見ようとするときには、認知的、神経心理学的な視点も欠くことができないことを確認した。

3. 描き手の立場からみたときにどのように空間構成が発展してゆくのかを検討するために、羅列段階からたとえ微かにでも構成が生じる段階や、作品を描く時の被検者のプロトコルに注目したところ、高石の『構成型』

とは必ずしも一致しない空間構成の発展過程が想定されたため、試案を作成した。高石の『構成型』は線遠近法を究極の段階とする発展段階を想定しており、それは西洋的線遠近法を美術教育に取り入れている学校文化の中における発達段階を示すものとなっている。わが国における高齢者の風景構成法作品は必ずしもそれらの段階や型に適合するものではないと考えられた。出発点にアイテムの羅列があり、その後アイテムをとりあえず配置し、その次には結合するレベルにおいて、線遠近法ではない遠近法の表現が挿入されてゆく。ここでは、風景空間は必ずしも描き手の心に描かれた設計図（線遠近法的な見通し）に従って描出されるのではなく、ひとつひとつ描きながら、おぼろげに作り上げてゆく過程をとる。従来、風景構成法では、素白の空間に風景構成を行うことについて、川を描くときにすでに大地の奥行きや広がりを与える全体空間が予想されていなければならないとも言われる（山中,1984）のであるが、そうではない場合が存在することを高齢者の風景構成法から見てとることができるのである。

4. さらに事例からは、認知機能の変動によって高齢者の心的世界がかなり移ろいやすくなっている可能性が伺われ、風景構成法から高齢者の個性や心理的要素を読みとる可能性とその解釈を正当なものとするための経時的観察に基づく考察の必要性を確認した。

今回の研究は探索的であり、また、短期間で行われ事例数も少ないため、1.～3.に述べた点についてもまだまだ多くの検討を要すると考える。今後はさらに認知の問題を追求し把握した上で心理的空間に近づいてゆく方向を目指したいと考えている。